

# pen

with New Attitude

2/1

2008 No.21

特別定価 600  
yen

## ロンドン新世紀。

なぜ世界はこの街に夢中なのか？

創刊10周年記念・総力特集

ホテル&レストラン  
最新案内。

とじ込み付録

STIRLING  
ACKROYD  
TO LET  
BT Office Floors  
020 7729 7763  
ackroyd.com

to let  
020 7729 6262

Dominion  
BASEMENT  
TO LET  
020 7729 8222  
www.don  
MT  
stud

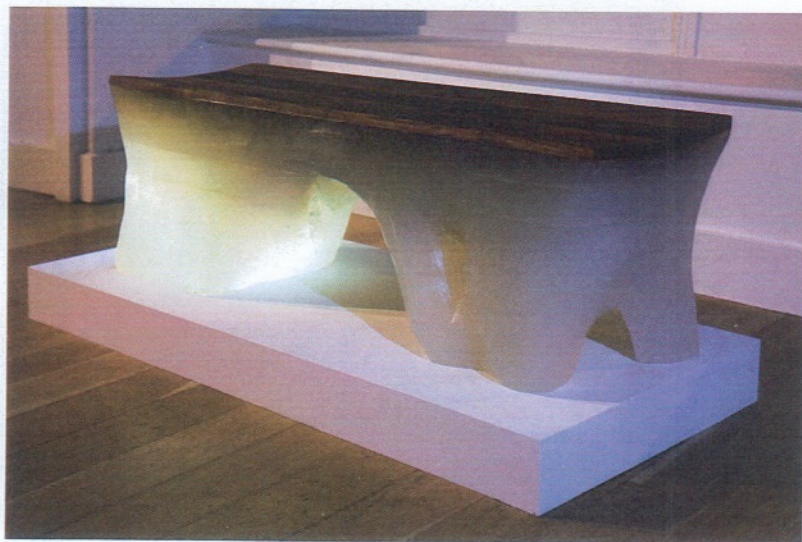
to let  
020 7613 6262

24

# 若き才能を発掘する、キュレーターの挑戦。



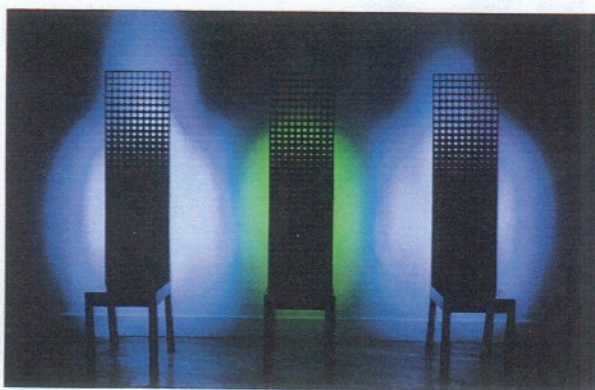
ピーター・マリーゴールドの『オクターブ・シリーズ』。まるで音階を奏でるように木の枝と4枚の棚で表現した、デリケートな作品。



ジュリア・ローマン&ジェロ・グランドマンによる『エロージョン・シリーズ』。石けん素材のベースに、木の天板をのせたベンチ。いずれは自然に戻る素材感を強調。



元写真家のスチュアート・ヘイガスが手がけた『テールランプ』。彼は海岸に打ち上げられた廃品を使ったシャンデリアでブレイクした。



モーリッツ・ウルフの『オールドメイヤーの椅子』。ロイヤル・アポイントメントのLEDの光の色が、椅子に座る人の服に応じて変わっていく作品。

「先見の明」「チャレンジ精神」、そして「長いものに巻かれるないガッツ」。この3つをあわせ持ち、ロンドンのクリエイターたちをサポートしている女性リビー・セラーズだ。RCA（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート）でデザイン史を専攻後、さまざまなデザイン・プロジェクトに参加し、企画を手がけた経歴を持つ。

## 次世代のクリエイターを、世界に向けて発信したい。

2001年、デザインカウンスル主催で行われた「大いなる遺産」展も彼女の仕事のひとつ。9・11事件直後のニューヨーク・セントラル駅で、英国人デザイナーの作品100点を展示するという、歴史的な展覧会でもあった。「テロ直後の緊張感もあって消耗しきってしまった」と言う彼女は、その後デザイン・ミュージアムのキュレーターに。ピーター・サヴィル、マーク・ニューソン、トーマス・ヘザウィックなどの展示をキュレートし、若いデザイナーの担当もした。「とても勉強になったし、充実した仕事だった」とは言うものの、この安定した職もわずか5年間で辞めてしまったところが、セラーズの人柄を表している。

「有名なクリエイターより、次世代のクリエイターを送り出したいし、新しいことにチャレンジしたい。ロンドンにはすばらしい人材がいるんだから」

と、昨秋に「ギャラリー・リビー・セラーズ」を設立することに。しかし、資金集めも自分でしなくてはならないため、最初からスペースを持つことは難しい。そこで、ギャラリーをゲリラ的に出沒させる、という方法を発案。運よく、昨秋のデザイン・ウィーク中、無料スペースの提供を受け「グランドマテリア」という展覧会を立ち上げることに成功した。

具体的には、ロンドン在住のクリエイター4人に、挑発的な素材やフォルム、というテーマで依頼した作品を、期間限定にして数カ所で開催。そのつど販売するという方式だ。

石けんを素材にしたベンチやクルマのテールランプを使ったシャンデリアなど、気鋭のクリエイターによるアート性の高い作品は、各方面から高い評価を受け、売約もかなり入ったという。「場所や資金がなくてもギャラリーが運営できると証明できた。マイアミでの展示も好評だったし、この方法をしばらく続けていきたい」と言う。

物価は高いし、若いクリエイターたちにとって、ロンドン暮らしは楽ではない。それでも彼らが世界中から集まってくる理由は、クリエイティブな環境とともに、こうした受け皿があるからだ。セラーズのように、組織に属することもなく、果敢に自分の信じる道を進むそのガッツ。これこそがロンドンの原動力なのだ。